

資料1

平成29年度自己評価表

鳥取県立鳥取聾学校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)</p>
---------------------------	--	----------------------	---

年 度 当 初				評 価 結 果 (3)月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
確かな学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上)	(幼) ○体験的な活動ができる環境や機会を設定する。	○経験が不足していたり、情報が入りにくかったりして、興味・関心がせいまい傾向がある。	○いろいろな事象に興味・関心を持ってかかわることで、考えて行動したり挑戦しようとしたりすることができるようになる。	○身近な事象に興味を持てるように、掲示物等を工夫する。 ○継続的に興味や関心を持てるような題材を工夫し、体験的な活動の場を多く設定する。 ○自分で考えることができるような教材の提示や声のかけ方を工夫する。	○各学級の月計画を学部で見合い、行事等で大切にしたい、獲得してほしい言葉を共通理解し、行事の計画や掲示物作成に活かした。興味を持って掲示を見たり行事の中で言葉を覚えたりすることが増えた。 ○具体物やイラスト等を活用し、教材を視覚的に提示するとともに、簡単な5W1Hを意識した発問をすることで、思考を促すよう工夫した。少しずつ自分で考えて行動する姿も見られるようになってきた。	B	○毎日の遊びや朝の会の中で、幼児の思考を促す声かけができるように、学部の教職員全体で話し合い実践していきたい。 ○幼児が様々な事象に自ら興味をもって関わられるように、幼児とともに遊ぶ事を通して気持ちを共感していきたい。
	(小) ○基礎学力が向上するよう、学びへの意欲を高める発問の工夫を取り入れた授業づくりに努める。	○教室環境の工夫により学力が定着しつつあるが、長文を読んで内容を読み取ったり、文章を読んで質問に答えたりする等の読解力に課題がある。	○児童が主体的に学習に取り組み、文章を読んで考えたり質問に答えようとしたりすることができるようになる。	○主発問を的確に行い反応を予想して補助発問を工夫する等の支援を取り入れた授業づくりをする。 ○的確な実態把握ができるよう、実態に合った検査を実施する。 ○つまずきの記録から支援を検討する事例研究会を行う。 ○授業研究会を行い、一人一人の目標を達成できるように主発問や補助発問を検討する。	○絵画語彙発達検査、WISCなどの検査を実施している。小学部の教員全員が一人一授業を行い児童一人一人に合った主発問・補助発問の工夫を行った。発問をする際には何につまずいているのかを見極めることや、発展的発問を取り入れたりすること、また、意味理解を深める支援として動作化・劇化が有効であること等に気づくことができた。長文理解については、内容を正確に読み取ることや、尋ねられたことに答えることに課題が残っている。	B	○豊かな体験とそれを言葉に結びつける学習を意図的に設定していく。また、児童が能動的に考え表現することができるよう、日々授業づくりに努める。その際、外部講師の先生を招き授業研究を行っていく。
	(中) ○実態把握に基づく支援方法の共通理解と論理的思考力を育成するための支援の工夫に努める。	○基礎学力の定着が課題である生徒、思考力・応用力が課題である生徒と実態は異なるが、視覚的支援や体験的な活動を取り入れることにより意欲的に学習しようとする。また、共通して、教師に一つ一つ具体的に質問されたときは、ヒントをもらいながら答えようとするができるが、知っていることをまとめて説明したり、根拠に基づいて伝えたりすることを苦手としている。	○生徒が自分の思考を整理し、多面的に考えたり、根拠に基づいて説明できたりする。	○発達検査等の共通理解や行動観察等を通して生徒の実態把握を行い、生徒の認知特性に応じた思考を高める発問の仕方や支援方法の工夫に取り組む。 ○授業研究を行い、生徒の思考を促す授業ができているかどうか検討する。	○授業や教材を見合う中でお互いに良い所を取り入れようとしたり支援を工夫したりした。 ○複数の資料や生徒とは異なる見方や意見を提示することで、生徒は多様な物の見方や考え方を知り、立ち止まって考えられるようになってきた。 ○試験結果や題材の取扱い方を工夫し、生徒の苦手なところを以前よりもアプローチできるようになり、思考を深めるための支援ができるようになってきた。	B	○各教科の担当が集まり氷山モデルを用いて生徒一人一人の実態について考える機会を持つ。また、発達検査等の実態把握についても生徒に係わる担当が集まり共通理解の会を開く。 ○生徒の思考を促す授業について、引き続き授業研究会を開いて検討を進める。
	(高) ○自学自習の力をつけるために、個々の生徒に応じた学習指導法の改善・工夫をするとともに、家庭学習の習慣化の徹底を図る。	○家庭学習では、内容や分量を自ら調整できない生徒の実態もみられる。日々の授業を活用しながら、指導法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。	○家庭学習について、個々の生徒が学習時間と目標を設定し、継続して学習できるようにする。	○家庭学習の内容や時間の確認を継続して行き、生徒の学習意欲の喚起を促すとともに個に応じた家庭学習の仕方を具体的に指導する。 ○学部会や進路を語る会などを中心に情報共有し、個々の生徒のつまずきや特性に応じた課題を共通認識し、指導法を工夫する。	○学部会や進路を語る会を通して生徒の課題を共通認識し、進路に向けての動機づけや自主学習を喚起する方法や自学自習ができる課題を工夫し、実践したことで、全体として生徒は家庭学習の習慣が定着しつつあり、意欲的に学習に取り組むことができるようになった。しかしながら、一部の生徒で学習内容の見直しがなされず、学習内容の質の改善の余地が多く、結果として学力に反映されていない状況もあった。	B	○今後、自学自習の力をつけるために、家庭学習の内容や仕方の指導を工夫するとともに、各生徒の学習実態について情報交換を密にしなが、個々の課題の解決を図りたい。特に、授業における小テスト、スモールステップでの基礎基本の確認、教師によるノート点検・添削を行い、学習内容を振り返り、生徒にフィードバックするなど、生徒の状況に応じた支援を継続していきたい。

自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実 (たくましく生きる力の育成)	(支)	○家庭と連携し乳幼児のこことばの育ちを促す。 ○通級指導で難聴への理解を深め自己認識を高めるような指導や支援に努める。 ○個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。 ○聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。	○子どもへの接し方に支援の必要な親子があり、伝わりやすい話しかけについての意識を高める必要がある。 ○年齢に応じた自己認識が育っていないため問題解決に向けた行動を起こしにくい児童生徒が多い。 ○支援会議等で本人・保護者・担任との間に考え方や意識の違いが見られ、ニーズの把握が難しい場合がある。 ○医療との学習会で情報共有をしたり、研修会の講師として福祉や教育との連携を図っている。	○子どもの気持ちに寄り添いながらかかわることのできる支援を学び実践につなげることができる。 ○場面に応じて学んだことを活かし問題解決をしようとする。 ○難聴に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようにする。 ○関係機関と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換ができる。	○担当者がかかわり方のモデルを示すとともに、視覚的な支援方法を具体的に示す。 ○通級指導の連絡帳を通じて担任や保護者と情報を共有し、課題に対して共通の認識が持てるようにする。 ○難聴児にかかわる関係者に対し校内研修会への参加を募ったり情報交換の場を提供したりして、難聴への理解を促す情報発信をする。 ○聴覚障がいに関するリーフレットの配布や啓発活動を行う。	○継続指導の親子のかかわりで、保護者が表情豊かに話しかけ子どもとのやり取りを楽しむ姿が増えた。 ○対象児童が問題解決に向けた具体的な行動を通級担当者と共に考えることで自分なりの対応策を考えることができ、自分自身を振り返ることもできた。 ○事前に参加しやすい日時を聞き取り研修会を設定したことで参加人数が増えた。 ○関係機関への啓発を全て終え、保健師の軽度・一側性難聴への意識が高まるとともに、リーフレットの追加依頼もあり医療との連携が良好になりつつある。教育相談の内容がわかりやすいようHPを更新した。	○各家庭の状況を把握したうえで、実態に合わせた活動内容を考える。 ○通級指導へのニーズを本人・保護者・在籍校・本校担当者との間で共通理解をし指導内容を考える。 ○在籍校のニーズを細かく把握し、必要な情報を的確に提供できるようにする。 ○啓発用ポスターを作り直し啓発を兼ねて再度配布する。学校での教育相談の様子を紹介のあった機関に報告し、連携が双方向になるようにする。
	(幼)	○幼児の実態に応じ、様々な人とかかわることができる場を設定したり、かかわり方を支援したりする。	○基本的な生活習慣や生活のきまり、遊びのルール等がまだ身に付いていない場面も見られるが、他者とのかかわりを好む。	○同年齢の園児とのかかわりを通して、集団での生活のきまりや遊びのルール等を身に付け、友だちと楽しくかかわれるようになる。	○友だちとかかわる中で、ルールの定着を図ったり意欲を高めたりするように学校間や居住地域での交流および共同学習の場を設定する。 ○保護者研修会を実施し、子どもたちへのかかわり方について共通理解を図る場を設定する。	○ルールのある遊びを意図的に設定し幼児同士がかかわり合いながら遊ぶことができるようにした。教師を介してではあるが、友だちと楽しくかかわることができるようになってきている。 ○保護者研修会で、幼児とのかかわり方や悩んでいること等、講師と一緒に話し合う機会を設定した。思いを聞く中でかかわり方等について連携することができた。また、保護者同士のかかわりも深まってきた。	○ルールのある遊びの教材研究を進め、友だちとかかわり合う機会をより多くもてるようにしたい。 ○継続して保護者研修会を設定し、幼児の実態や様子を保護者と教職員が一緒に共通理解できる場も設けていきたい。
	(小)	○基本的な生活習慣の定着を図り、社会生活に向けて望ましい習慣や態度を育てる。	○ルールを守ろうとする姿が見られるようになってきているが、基本的な生活習慣、学校生活のきまり等について自ら判断して守ろうとすることは不十分であり指導が必要である。また、社会生活におけるルールなどは未習得であることが多い。	○基本的な生活習慣が定着し、集団活動や社会生活においてきまりやルールを自ら守ろうとする。	○合同学活での集団活動等でモデルを示したり、どう行動したらよいか気づけるような声かけをしたりする。 ○場面をとらえて適切な行動ができるよう声かけを行う。	○児童会を中心に、廊下を走ってしまうことについて改善策を話し合い、その結果、廊下の中央にペットボトルを置いてみるようになった。合同学活の時間に全員で歩いてみることによって、少しずつ効果が出始めている。きまりやルールを自分たちで話し合っ守ろうとする姿が少しずつ見られるようになってきている。	○定期的いきまりやルールについての学習を設定し、これらが意識できるよう活動を工夫していく。児童会を中心に月目標などをわかりやすく提案し、全員で振り返りができるようにしていく。
	(中)	○進路に関する学習や職場体験学習の充実を行い、生徒自らの意思で進路を決定できる力を育てるとともに、社会生活に必要なマナーやルールについて学習する機会を設定する。	○将来就きたい職業や高等部への進路をはっきり決めている生徒、まだ将来像が描けず次の進路先についても決めかねている生徒と実態は異なる。 また、社会生活に必要なマナーやルールについても言葉づかいや行動について一人一人の実態や課題が大きく異なっている。	○進路に関する学習を通して、生徒自らの意思で進路を決定する。 ○職場見学・職場体験学習等を通して、社会生活に必要なマナーやルールについて知り、実践しようとする。	○体験入学などの進路に関する学習や職場体験学習の充実を図る。 ○職場体験学習や進路に関する学習等を通して、社会生活に必要なマナーやルールが身につくようにする。	○進路学習や体験的な学習を通して自分の意志で進路を決定できた。また、自分の進路について具体的にイメージできるようになり、自分にあった仕事内容についても考えられるようになってきた。 ○「先輩の話を聞く会」で社会で仕事をし、自立して生活している卒業生の姿はよき手本となり、社会生活に必要なマナーやルールについて改めて考える良い機会ともなった。	○学年や実態に応じて進路に関する学習や職場体験の内容について検討していく。 ○ルールやマナーについて学部で共通理解し、普段の生活の場でも機会をとらえ指導を行う。
	(高)	○常に自立と社会参加を意識した生徒指導の徹底を図り、課題対応能力やキャリアプランニング能力等を育成し、規律ある生活習慣を身につけられるようにする。	○多くの生徒が落ち着いて生活できている。しかしながら、自分で考えて行動する習慣が身につけていない現状もみられる。そのため、自立や社会参加に向けてさらに自ら考え行動する生活習慣の確立を目指す必要がある。	○将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉づかい)を守り、自ら考えながら学校生活を送る。 ○社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。	○生徒が課題意識をもって生活できるように、全教職員で共通認識し、指導を周知徹底する。 ○生徒版段階表や諸検査をもとに実態把握し、生徒一人一人の進路を考えた授業の工夫をする。	○「働き続ける力」の育成をテーマに学部研究を行い、一人一授業に取り組む中で、生徒は自分を見つめ直したり、社会参加に向けてのシュミレーションを行ったりすることができた。特に学校祭や他校との交流の機会を効果的に活用することができた。また、3年生は4月から働くためのルールを今から守って生活する必要性を意識するなど、就労に向けて生徒の変容が見られた。	○個々の生徒の変容が見られるようになったが、行動に移す経験がまだまだ不足している課題も明らかになった。学校の教師や生徒以外の人に自分を表現する場を更に設定し、生徒の課題や目標を意識させていきたい。そして体験や活動の後は、必要に応じて教師が確認・整理して生徒に返す支援をしていく必要もある。

	<p>(幼)</p> <p>○心の動きを大切にし、表現力を高める指導を工夫する。</p>	<p>○自分の思いを伝えたい気持ちはあるが、その気持ちを伝えることが難しい場面が見られる。</p>	<p>○朝の会の伝え合い活動で幼児が思いを表出できるようになる。</p>	<p>○幼児の思いをくみ取り、表現できるように支援する。 ○話しかけが理解できるように実物や絵等を提示する。 ○話し合いの場等を設定し、自分の思いを伝えたり、友だちの思いをくみ取ったりする場面を設定する。</p>	<p>○一人学級では他学級と合同の朝の会をする機会を多く持ち、話し合う場を設けた。絵日記発表では、助詞を使って思いを表現することが増え、意欲的に発表したり答えたりする様子が見られるようになった。教職員が友だちの思いをくみ取った言葉かけをすることで、幼児同士で話す場面も増えてきた。</p>	<p>B</p> <p>○引き続き、意図的に話し合い活動ができる場や機会を設定し、時には教職員が幼児役をしたり、発問を投げかけたりする等、幼児同士が思いを伝え合うことができるように支援を工夫していきたい。</p>
	<p>(小)</p> <p>○友達との活動を通して自分の思いや考えを伝え合え、相手の話を理解できる力を育てる。</p>	<p>○自分の考えを友達や先生に主体的に伝えようとする場面が増えている。 ○自分の思いを周りの人に伝えようとする気持ちはあるが、言葉を正しく使って表現することが未習得である部分がある。 ○友達の話を最後まで顔を見ながら聞いて理解することはまだ難しい。</p>	<p>○自分の経験や考えを、様子や気持ちを表す言葉を使って詳しく伝えようとする。 ○相手の話を最後まで聞き、自分の考えを伝えようとする。</p>	<p>○学習時間内では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等の学習ルールを徹底する。 ○学級活動等の集団活動において、友達や先生と伝え合う学習場面を多く設定する。 ○帰りの会等において、ヒントになるような声かけをしたり、気持ちを表現する言葉カードを掲示したりする。</p>	<p>○少しずつ児童同士のコミュニケーションが円滑になってきている。自分の気持ちを相手に伝えようしたり、友達の話を最後まで聞こうとしたりする姿が多く見られるようになってきた。話し合いの中で、友だちの会話に割り込まないようにすることを自分で気づく場面も増えてきている。</p>	<p>B</p> <p>○児童が伝えようと自発的に思えるような学習場面や、何について話すのかを明らかにして話し合う学習場面を工夫して行っていく。児童の伝えたいことを教師がモデルとして示したり、言葉をつけ加えたりする支援をその都度行っていく。児童が伝えることができた時には、称賛し自信になるよう支援を行っていく。</p>
<p>心身の健康と豊かな自己表現力の育成 (心身の育成)</p>	<p>(中)</p> <p>○外部専門家によるワークショップや弁論、報告会、交流活動等を通して自己表現力を育成する。</p>	<p>○自分の思いは伝えられるが、相手の気持ちや立場を考えずに一方的であったり、自信を持って発言できなかつたりするなど、一人一人の実態や課題は異なる。報告会などでは、事前の練習を積み重ねることにより、自信を持って表現できつつある。</p>	<p>○自分の考えを自信を持って表現できる。 ○相手の立場や場に応じた表現ができるようになる。</p>	<p>○自分の思いを自信をもって豊かに表現できるよう、様々な報告会、弁論大会や外部講師によるワークショップなどの機会を設定する。 ○話し合いの際には、「話し合いのオキテ」を意識させ、相手にわかるように表現できるようにする。</p>	<p>○弁論や報告会、交流に向けた学習で、見る人、聞く人、参加する人等相手を意識した上で自分はどうするのかやり取りをする活動を通して、相手の立場に立った考え方や表現ができるようになってきた。 ○発表の場では事前に練習をして臨むと自信をもって表現することができた。教員同士が情報交換し、良かったことや頑張ったことを生徒に伝えることで生徒の励みにつながった。</p>	<p>B</p> <p>○報告会などの前には、事前学習をすることで自信をもって表現することにつながり、それが自信へとつながるので、事前事後学習を大切にする。 ○専門家によるワークショップや報告会など多くの人の前で表現する機会を持つ。</p>
	<p>(高)</p> <p>○現場体験学習等を活用し、社会を意識した体験的学習を充実させるとともに、弁論大会や帯自立活動等を活用し自己表現力を育成するなど、コミュニケーション力を身につける。また、社会自立のために自分の心身の健康と向き合うことができるようにする。</p>	<p>○実際に職場の人間関係を円滑にしたりするためには、コミュニケーション力が必要であることは少しずつではあるが生徒に理解されつつある。更に自己表現力を高めるなど自ら積極的にコミュニケーション力を身につけるなどの実践力が必要である。また、自立や社会参加に向けて、自ら体調管理に努めることも課題である。</p>	<p>○現場体験学習等で相手や場に応じて、適切にコミュニケーション力が向上する。 ○帯自立活動をはじめ、弁論大会やステージ発表を通して、表現力が向上していく。 ○自分らしく生きるために心身の健康に関する意識が高まる。</p>	<p>○具体的な場面を想定して事前に練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 ○帯自立活動を活用し、状況に応じた日本語の使い方(謙譲語・尊敬語)や意味の学習を積み重ねることによって、一人一人の日本語力を伸ばす。 ○心身の健康を保つため、自立活動を中心に就労や一人暮らしを想定し、自らストレスに対処する方策等について考える場面を設定する。</p>	<p>○場に応じた言葉遣いなどは身につけてきているが、説明を受けてわからないとき、必要に応じて聞き返すことができないという課題をもった生徒もいる。弁論大会を通じて、日頃考えていることや自分の主張をまとめて表現できたが、書き言葉で表現する生徒もあり、今後も継続して人に伝える力を培うことについて指導支援が必要である。また、自立や社会参加に向けて、自ら体調管理に努める意識も高まりつつある。</p>	<p>B</p> <p>○思っていることや話したいことがあるが、話しかけることをためらう生徒の姿も見られる課題に対しては、今後積極的なコミュニケーションを身につけるため、学校内外でも更に意識して、継続して支援していきたい。また、年代との関わりが少ないという課題に対しても、生徒がコミュニケーションをとる力を向上させていくために、高校生や大学生と交流する機会を更に広げていきたい。</p>